

Title	キャンパスのなかの戦争遺跡： 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Sub Title	The Asia-Pacific War remains on campus : discussion on academic and educational values of the Hiyoshidai Imperial Japanese Navy Bunkers : Purpose of the symposium and introduction of the speakers
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・ 3 (2011. 6) ,p.35(133)- 38(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：キャンパスのなかの戦争遺跡： 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0035">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0035</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## キャンパスのなかの戦争遺跡

——研究・教育資源としての日吉台地下壕——

開催趣旨

安藤 広道

皆さま、本日はお忙しい中、このシンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。ただ今より、二〇一〇年度三田史学会大会シンポジウム『キャンパスのなかの戦争遺跡―研究・教育資源としての日吉台地下壕―』を開催いたします。これから、本シンポジウムの趣旨、狙いと、発表の構成、発表者のご紹介をさせていただきます。

二〇〇八年九月末、創立一五〇年事業の一環として計画された、日吉キャンパス内の蝮谷体育館の建設予定地内にて、アジア太平洋戦争時の地下壕の出入口が三基発見されました。体育館を計画通りに建設しますと、出入

口を破壊してしまうことになるわけですが、慶應義塾は、その学術的価値に鑑み、塾の判断で出入口を保存するため建設計画を見直すとともに、その実態を明らかにするための発掘調査を四次にわたり実施しました。その成果につきましては、現在報告書にまとめていますところですが、昨年、新聞等でも報道されたように、それまで全く知られていなかった特殊な構造をもつ出入口施設の検出をはじめとする、数多くの重要な発見がありました。

アジア太平洋戦争の末期、日吉キャンパスは、旧帝国海軍に貸与され、その中枢的な組織が集中する軍事拠点になっていました。海軍は、日吉の地で、本土決戦を視野に入れた軍事活動の指揮命令を行っていたわけです。敗戦後、地下壕の出入口の多くは壊されたり塞がれたりして、一部を除いて地下壕の内部に入ることはできな

くなっています。また、海軍が使用した建物についても、軍事活動の事実を物語る証拠の多くは失われてしまったようです。一方で、一九八〇年代から、地下壕を保存し、歴史教育、平和教育に活用しようとする市民運動が始まり、今日までに、後でご報告いただくような大きな組織、運動に発展するまでに至っております。また、近年では、国も、アジア太平洋戦争期の日本の軍事的活動を現在に伝える重要な物的証拠を文化財として評価し、史跡に指定する準備を進めていると聞いています。こうした、戦争遺跡の保存・活用に対する関心の高まりのなかで、旧帝国海軍の中核組織があった日吉は、全国的な注目を集めるようになっていくわけです。

しかしながら、慶應義塾内に目を向けますと、地下壕を含む戦争遺跡に対する関心は必ずしも高いとは言えないようです。事実、日吉に集う学生の多くが、戦争遺跡の存在を意識することなくキャンパスを後にしています。私は、こうしたキャンパス内の戦争遺跡に対する関心の低さは、三田史学会のこれまでの研究活動と無関係ではないような気がしています。実は私は機会があつて、『史学』の目録を作る仕事をしたのですが、これまでの『史学』では、アジア太平洋戦争に関する研究、報告が

なされること自体が非常に稀で、地下壕をはじめとする日吉の戦争遺跡についても、言及されてこなかったというところがわかりました。

もちろん、三田史学会がこれまでアジア太平洋戦争のことを正面から取り上げてこなかった背景には、決して単純とは言えない理由があるはずですが、また、それらはいくつかが現在でも非常に評価の難しい問題を含んでいることも、重々承知しているつもりであります。しかしながら、三田史学会がアジア太平洋戦争やキャンパス内の戦争遺跡を積極的に取り上げていないという現状が、キャンパスに集う学生にとって、戦争について深く考える重要なきっかけとなるはずの遺跡の存在から、彼らの目を遠ざけることにつながってしまったとすれば、それはやはり残念なことと言わざるを得ないと思います。そこで、本シンポジウムは、昨年、慶應義塾が地下壕出入口の発掘調査を実施し、その保存を果たしたということをきっかけとしまして、三田史学会会員をはじめシンポジウム参加の皆さまに、まずは足元に眠る重要な研究・教育資源の存在を知っていただき、関心をもってもらうことを目的としております。

この目的を果たすために、シンポジウムは、以下の三

本の報告と、三本のコメントで構成しました。

まずは、発掘調査の成果と地下壕保存の経緯についての報告を、私が行うことにしました。地下壕そのものについての簡単な説明もここでやりたいと思っています。

次に、日吉台地下壕保存の会の副代表でいらっしやる新井揆博先生から、二〇年以上に及ぶ会の活動についてご報告いただくことにしました。日吉台地下壕を含む戦争遺跡については、その文化財としての価値を見出そうとする動きが、専門家の研究の蓄積を待たずして、市民の中から湧きあがってきたという点に特徴があります。保存の会の活動は、単に歴史学の成果の受け手ではない、歴史を構築していく主体でもある市民と、我々歴史学者の研究との関係について再認識させてくれる、重要なきっかけになるのではないかと期待しております。

報告三としましては、山梨学院大学の十斐駿武先生に、戦争遺跡研究の現状と課題についてお話しいただくことにしました。先生は、戦争遺跡の研究・保存・活用をめぐる運動のオピニオンリーダー的存在であり、全国の研究者、市民団体からなる、戦争遺跡保存全国ネットワークの代表も務められています。日本における戦争遺跡の研究・保存・活用をめぐるこれまでの成果と、今後の課

題について知ることは、日吉の戦争遺跡の研究・保存・活用を進めるうえで不可欠であることは言うまでもありません。

さて、報告の後は、コメントとして、三名の先生に話していただくことにしました。

まずは、中国近現代史がご専門で、靖国参拜問題をめぐる日中関係についてのご研究もなさっている中部大学の一日谷和郎先生に、中国における日中戦争遺跡の保存・活用の現状についてお話しいただきます。アジア太平洋戦争は、各地に戦争の傷跡を残したわけでありまして、日吉台地下壕も、アジア太平洋戦争全体のなかに位置づけて考察をしなければなりません。そうしたなかで、被害者側の戦争遺跡の研究・保存・活用の取り組みを知ることが、今後のアジア太平洋戦争期の研究を進めるうえで、多くの課題を浮かび上がらせてくれるものだと期待しております。

次に、西洋史学専攻の神田順司先生に、ベルリンの地下壕についての現状をお話しいただきます。ベルリンにはヒトラー終焉の地である総統地下壕をはじめとして、数多くの地下壕が存在します。総統地下壕については、二〇〇六年に案内板が立ったことがニュースにもなりま

したが、同じ加害者側であっても、ドイツは日本と戦後処理のあり方が異なっていますし、ネオナチといった大きな問題もあります。そうした違いが戦争遺跡の扱いとどのように関わっているのか、やはり多くのことを考えさせてくれるはずです。

最後に、福澤研究センターの都倉武之先生に、アジア太平洋戦争と慶應義塾ということでお話しいただきます。アジア太平洋戦争と大学との関係については白井厚先生の厚いご研究がございますが、今後塾史として、あるいは日本の近現代史のなかで、この問題に取り組む際の課題等についてお話しいただきたいと思っています。

以上、六名の発表によって、何かひとつの結論を導くということではなく、まずは日吉台地下壕や戦争遺跡が、多様な視点から研究されるべきであるとお伝えすることに主眼を置いております。それでも重要な論点が抜け落ちているでしょうが、このシンポジウムを通して、ひとりでも多くの方に研究・教育資源としての戦争遺跡、中でも日吉台地下壕に関心を持っていただきたいと思います。できるだけ多くの先生に発表していただきたいと考えたため、討論や質問等の時間は用意できませんでしたが、その点ご了承くださいたく存じます。

それでは、是非最後までお付き合いください。